

だ  
ん  
ま  
ま

徳田翼

絵  
小野裕美



一緒に暮らしていた僕のばあちゃんが、二ヶ月ほど前に死んだ。そのばあちゃんが生前に壊れたレコードのように何度も何度も言っていた話がある。ばあちゃんはいったんその話を始めてしまうと、通り雨のせいで洗濯物を取り込まなきゃならないとか、そんなことがない限りは中断したり途中でやめたりすることはなかった。

あんた、知つとるかいな？ だごんさま。まあ聞きたい。だごんさまはねえ、やさしいんよ。恥ずかしがりやでねえ。え？ もう聞いた……？ そうかい。でね……むかしわたしがまだちいちゃいおかつば娘で、尾道に来たばかりのときじやった。

あんたも変なところが似てしまって人見知りみたいじゃけど、わたしも人見知りで全然友達ができんかったんよ。口をこう、への字に曲げてね、いっつも駅近くの堤防から向島を

見よつた。尾道水道をぼんぼんと言つたり来たりする船が好きで、学校から帰つてきたら、堤防に座つて日が暮れるまでずうっと眺めよつた。

だごんさまに会つたのは黄昏どきじやったね。いつもみたいだに堤防に座つて足をぶらぶらさせて、揺れる波を見よつたらいきなりじやつた。足元から声が聞こえたんよ。「への字顔すんな」つて。仰天して海に落ちそうじやつた。でも下を見ても、さっきまでと同じように波が寄つかえすばつかり。

それで変じやなつて思うて顔上げたら、いつものまにか私の横で魚が一匹、びちびちはねとんよ。堤防の上で。そしたらまた足元から声だけが聞こえて、「それ食つてへの字顔やめろ」つて。

「どなたさんですか」つて聞いたら、「だごん」つて返つてきた。わたしは「だごんさま、どこにおるんですかどこにおるんですか」ゆうて聞いた。

そしたら「知らん」って一言だけじゃったね。いろいろ言っただんじやけど、もうそれから返事せんようになってしまった。わたしは怖くなってね、魚もって家に帰って、それっきりなんよ。もしかして怒らせてしまったんかねえ。

ばあちゃんはその「だんごさま」とやらに感謝の気持ちを伝えられなかったことを心残りに思っていたらしかった。「お礼を言うまで死んでも死にきれない」とまで言っていたけれど、あっさり逝ってしまった。ばあちゃんは僕に最後の言葉を遺した。

「だんごさまに、ありがとうございますと言ってくれ」。それがばあちゃんに頼まれたことだった。

いつたいばあちゃんは何に遭遇したのか。だんごさまって何だろう。そんなことを考えていると、未知なるだんごさまを求めて僕の足は勝手に尾道水道沿いの堤防へと向かった。



あ？ だごんさま？ それかは知らんけど、なんかでけえ魚みたいなのやつおるよな。十年くらい前にここで夜釣りしよったんよ。そしてたらでつけえのが掛かったんよ。数時間はそいつと闘ったが、こっちが疲れてきた。いよいよ釣りざおごと海に引きずりこまれるかと思つたな。

おれは意を決して手え放して、最近買ったばかりの高えサオを諦めた。あつという間だったな。そいつが消えてった海は、またすぐ同じように静かになつてな。

姿？ 手足と背びれあつたし、なんか人間みたいな、魚みたいなやつだった。あんま覚えてねえけどな。なんせ気がついたら太陽が昇つとって……ん？ 氣を失つてたのかわか？ ハハハ。そんなわけねえじゃねえか。ハハハ。

ああ。そういうや、最近そのだごんさままつのに会つたつて子どもがおつたな。そのへんの店でアイス食つとるか、商店街でよく一人

で遊んどるのを見るな。

そう言うと釣り人は、急にひゅんと釣りざおを動かし、はるか遠くに投げた。堤防の上から見る薄い緑色の水面は太陽の光を反射して輝き、釣り人の目は帽子のつばで陰になっていた。その目は真剣そのものだったので、僕は何も言わずにアイス屋へと向かう。



ウソじゃないよ、ほんとうのこと。だごんは、あたしね、堤防に座って向島の絵を描きよったんよ。夏休みの宿題で。そしたらびゅううって風が吹いて、まだ描きかけの絵が飛びちゃった。あたし、急いで手え伸ばしたけどダメじゃった。

紙がくるくるって回って海に落ちるかと思ったら、水の中からざばあってすごい毛むくじやらの黒いのが出てきたんよ。ウソじゃないよ。ううん、全然魚っぽくなかったよ。それで、紙を取ってくれて、堤防に上ってあたしのそばに来たんよ。あたしとおんなじくらしいの背の高さで、だごんって言った。ほんとうよ。

せっかくとってくれた紙はもうひたひたに濡れとったし、びっくりしとったから、あたし、言葉がなにも口から出てこなくなっちゃったんだ。だごんは毛だらけで表情は全然わからなかったけど、何か話そうとしとった。

そのときちやうど猫が堤防の上をこつちに

歩いてきよって、だごんはそれ見たらびくびくしてしてすぐ海に飛び込んだ。猫が怖いんかも。ウソじゃないよ。ほんとうにだごんに会ったんよ。アイス、おいしいね。ありがどう。



真つ黒に日焼けした女の子は、嬉しそうに  
バナラアイスを口に運ぶ。店内は冷房がきい  
ていて、汗ばんだ背中が冷たくなってきた。  
僕は勘定を済ませると、女の子に礼を言って  
先に店を出た。

外はさつきと変わらず蒸し暑かった。それ  
でも日差しが弱くなったぶんだけ、風が涼し  
くなっていった。潮風の匂いを嗅ぎながら、僕  
は乾物屋の前を通る。うちわを力なくあおぐ、  
店のおばちゃんと目が合った。どことなく魚  
を連想させる顔だった。



だごんさまのことを調べとるのってもしか  
してあんたあ？ ちよつと小耳に挟んだん  
じゃけど。そう、あたしもだごんさま、知っとる。  
だごんさまは偉い神様でね。尾道水道の向島  
沿いに隠れた暗礁があるじゃろ。フェリーも  
避けて通るところ。そこに住んどってんよ。  
昔からちよくちよく見た人がおる。大事にせ  
んどばちがあたる。

それで時々やってきては、人間を見とるん  
だど。どんな姿か？ あたしは見ることないね。  
あつはっは、いや、見えるものばかりが全  
てじゃないじゃろ。見えんでもだごんさまは  
おるし、ここでべらをこうして売れるんだっ  
て、だごんさまが尾道水道を守っとるおかけ  
じゃし。

おばちゃんの話が終わる頃には、もう周囲は夕日に照らされて黄色に染まっていた。乾物屋から出ると、僕はだごんさまについて考えながら堤防に上った。生ぬるい潮風が頬を撫でていく。堤防から足を投げ出し、船が白い波をはじめながら行き来を繰り返すのをぼんやりと眺める。

結局、だごんさまって何なのかわからない。魚みたいなものなのか、毛むくじやらの何かなのか、姿なんかないのか。神様なのか、生き物なのか、いいやつなのか、悪いやつなのか。名状しがたいものが僕の頭をぐるぐると回って、もう、全然わからない……。

「へんの字顔すんな」

声が足元から聞こえた。足元を覗き込むが、そこには誰もいない。波が寄せて返すばかりだ。

「……だごんさまっ？」

ふと横を見ると、だごんさまが魚を置いていた。だごんさまはしまった、という表情をしていた。



